

和紙 だより

越前和紙への提言



■尾村 知子(おむら ともこ)

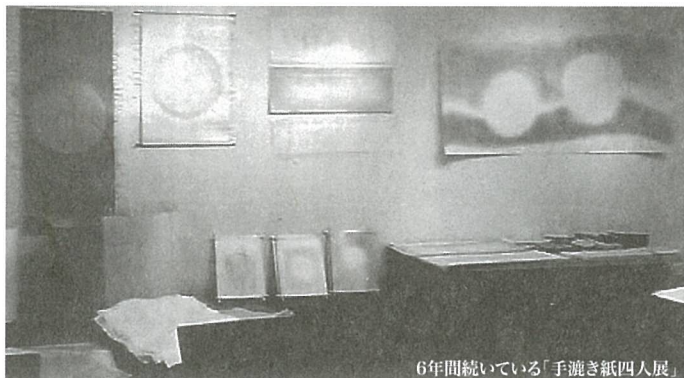
北海道函館市生まれ。北海道教育大学函館分校(社会科学専攻)卒業後上京。1989年「和紙の手帖」(全国手すき和紙連合会発行)の制作に携わり始め、その後、1990年から97年まで「季刊和紙」(同連合会発行)の副編集長を務める。その間「平成の紙譜」(全和連刊)、「美濃紙の伝統」(美濃市役所刊)、「和紙文化辞典」(わがみ堂刊)、「紙の道-源流から未来まで」(日本・紙アカデミー編)など、和紙関連出版物の編集・制作に関わる。現在、出版物の編集と和紙展示会の企画・運営などを手掛けている。

■尾村知子さん(編集者・和紙企画)
「作り手を作る前に、使う人とどける場作りを」

●「和紙の手帖」

一九八九年、当時勤務していた印刷会社に「和紙の手帖」という本の制作を依頼されたのが和紙との最初の出会いです。たしか越前が全国手すき和紙連合会(全和連)の事務局をしていたときに出た本です。この本は後にわがみ堂を立ち上げ、「季刊和紙」を創刊した浅野昌平さんの企画です。浅野さんは凸版印刷にお勤めをされていた方ですが、全和連から出している手漉き和紙カレンダーの印刷を手掛けたのが和紙に関わるきっかけだったそうです。何しろそれまで扱っていた洋紙とは全く性質が違うので、分からないことを和紙の関係者に聞いて歩いたりするうちに、和紙の情報がいかにかないかということに気が付き、自分が聞いたことを本の形にまとめれば、世の中の役に立つのではと、全和連に企画を持ちかけたようです。最終的に、和紙に関する五十のQ&Aという本になりました。一年くらい後に「季刊和紙」の編集を手伝ってくれないかと誘われたのが、和紙と深くおつき合えることになったきっかけです。

いると思っていたわけです。「和紙の手帖」を編集したときには、まだ全国に五百軒の手漉き工房があり、こんなに沢山の人が紙を作っているのかとびっくりしました。また、その紙がこんなに安いのかと驚きもしました。



6年間続いている「手漉き紙四人展」



2005年より隔年で、函館でも「手漉き紙展」を開催。2009年の模様

そういう彼らも使おうと思ってもどこに行ったら使いたい和紙が手に入るか分からないというのを聞いて、やっぱりと思い、漉いている人に伝えたら、「東京でもそんなに和紙で目に入りませんか？」って、おっしゃるんです。例えば、日本画の人は「雲肌麻紙」という紙を認識しているけれど、それが数多くある和紙のうちの一つであるという認識の仕方はしていないし、ましてや、一般の人は、和紙と言ってもぼんやりとしたイメージがあるだけで、体系として頭に入っていないし、そういう教育も受けていません。和紙は小学四年生くらいで勉強するらしいのですが、それも伝統産業の一つとして「紙を漉く」という仕事があるというくらいのことです。

●和紙の体系が頭に入っていない

当時は、人間国宝級の人が造る紙はこんな紙があり、というのは耳には入るけれど、実際には目に触れることができない、どこへ行ったらそういう紙が買えるのかも分からない。一般人にとっても、産地のいろんな手漉き紙をどこに行ったら見ることができるとかも、手に入るのかも分からない状態です。「季刊和紙」で一度和紙に興味のある一流のデザイナーに集まってもらって座談会を企画したことがありました。

だから、和紙を使いたい人がいても、手に入るまでにはすごく長い道のりが必要なんです。それで広告で東京で和紙を扱っている店をリストアップして掲載しましたが、結構あったにも拘わらず、何だか目に入らなかったのですよね。(笑)

自分自身にも知識がないのは痛切に感じましたので、編集も私が知りたいことを基準にしていったという部分が大いにありました。

●作り手と使い手をつなぐ活動

私が目指していたのは、和紙を使う人が増えてほしいということだったので、いろいろな和紙の使い方を提案していったつもりなのです。産地特集もそういう人が、どういう紙を漉いているのかを紹介することで、使うことに繋がっていかばいいなあという思いでした。しかし結果として、何か、紙を使うことよりも、作ることに注目がいつてしまったような気がします。作ることに興味を持つ若い人が増えました。(苦笑)。デザイナーが入ってきて、紙を売ることに繋がらない。紙を小売りはしているけれども、紙自体を営業している人がいない。紙をこうやって使ったらよくなりますよって提案できる人もいない。だから、作り手を作る前に、最終的に使う人に届ける場やプロセス作りをしないとダメですね。小津ギャラリーでやっている「手漉き紙四人展」の企画も最初は「手漉き和紙青年の集い」で知り合った人達で、産地に属さない方を紹介したいというのがきっかけでした。この業界風通しが悪くて、情報が行き交っていないので、使い手、売り手、新しい紙を探している人に実際に見て、触れて使ってもらうことで、少しずつでも新しい使い道を広げていければと思います。産業としての和紙を今の時代に伝えていかないとダメですね。



王子の「紙の博物館」の依頼により、ミュージアムグッズとして「和紙のみじん」を制作発行。手ごろな値段（1050円）で楮・三桧・雁皮の違いが分かる。

■「紙・未来・宇宙」
フレンズ・オブ・ダートハンター作品展

アメリカ人ダート・ハンター (Dard Hunter, 1883-1966) は、四十代の頃から世界四十ヶ国余りの手漉き紙工房を訪ね歩き、製紙の歴史と技法を十余部の本にまとめた紙史研究の国際的権威である。

一九二〇年代～三〇年代に収集された貴重な紙工芸品、道具、標本紙などは、最初彼自身によつて一九三九年、マサチューセッツ工科大学の「ダート・ハンター紙博物館」に収蔵され公開されていたが、一九五四年にはアップルトン (ウィスコンシン州) の紙化学研究所に移された。一九八二年には、コレクションの保護管理と彼の偉大な業績を発展させることを目的に、非営利団体「フレンズ・オブ・ダートハンター」(以後FDHと表記) が結成された。彼の膨大な収集品は、一九八九年からアトランタ紙科学技術研究所の付属施設、ロバート・ウィリアムズ・アメリカ製紙博物館に移管され、アメリカだけでなく紙を学ぶ人々のメッカともいべき場所、FDHはこの一角にある。当団体は、博物館展示、年次大会、紙を巡る様々の催しやアート活動、紙を媒介とした国際協力活動や社会貢献活動など、ユニークな活動をしており、世界中に四百名近い会員を有する。

今回、「和紙文化研究会」(代表・久米康生) の大柳久美さんを全体統括とし、FDHとの協働企画が実現。二〇〇九年九月初旬の二週間、FDHの紙アート展と記念講演会が開催された。第一会場の小津和紙(日本橋)内の小津ギャラリーでは、絵画、版画、書籍、彫刻、インスタレーションなど二十七の紙作品が展示され、第二会場の紙の博物館(王子)ではDHの



足跡をたどる年譜や書籍関連資料が展示された。九月五日には、紙の博物館二階講堂で、和紙研究の第一人者久米康生氏とFDH理事のポール・デンボード氏の講演会が開催された。講演会には、研究会のメンバー

を始め、アーティスト、デザイナー、紙修復家、学芸員、紙販売関係者、一般の紙ファンなどが集まり、スライドと講演を熱心に聞き入っていた。

●ダート・ハンターの業績と意義



DHの業績を講演する久米康生氏

今回の企画に合わせてDHの著書二冊を翻訳した久米康生氏は、講演会で彼の業績を紹介しながら、その今日的意義を解説。DHの紙研究の特徴は、文献を介して研究されること、多い紙研究とは違い、地球を二十周する五十万マイルの旅を重ねたフィールドワークを

重視していることだという。南太平洋のタヒチ島から、クック諸島、フィジー諸島、トンガ諸島、サモア諸島を巡った旅は一九二七年「原始的な紙つくり」として出版される。その後伝統技法を求めて、日本、韓国、中国、インドシナ、タイ、インド、フィリピン、アラビア、アフリカ、メキシコ、ヨーロッパ諸国を船旅と陸路で回る。日本には、一九三三年に訪れ、東京、福井、岐阜、大阪、高知、愛媛、岡山、埼玉などを現地調査し、「日本・韓国・中国への製紙行脚」にまとめる。この本の中で彼は、一、類書では殆ど論じられないことになった漉き具に注目し、二、日本の手漉き紙が製紙技術の中で世界最高だと評価し、三、日本人が殆ど無限の用途に紙を使っていることに驚嘆し、四、流し漉きと溜め漉きの用語を提案し、五、東洋独特のネリ(存在を明らかにするなど、後の和紙研究にも必須の鋭い洞察に基づいて論を展開しているという)。

●フレンズ・オブ・ダートハンター (FDH) の活動



FDHの活動を紹介するポール・デンボード氏

ダートハンター紙博物館を支援するために結成されたFDHは、ハンター自身の多岐にわたる興味を反映するように、会員は、紙漉き、アーティスト、タイポグラファー、製本・装幀家、修復家、司書、歴史学者、マーブリング作家、教育者、版画家、出版関連、印刷関係者、パルプ・製紙会社や一般の紙愛好家などで構成されて

いる。同会理事のポール・デンボード氏が、メンバーとその活動をスライドで紹介してくれた。年一回の大会では講演、実演、ワークショップ、展示などが催され、年三回発行の会報誌には会員達の思いや体験記、意見の交換などが掲載されている。紙のファン作りにも積極的にインターネットも受け入れている。興味深いのは、紙を通じた社会貢献活動を行っているメンバーだ。例えば、途上国で人々の生活や地域を豊かにする手段として、紙漉きや製本を教える国際援助活動。経済的自立の手助けばかりでなく、現地の人々の教育としても効果があるという。また、元製紙会社の技術者だった人は、手漉き紙と機械漉き紙の橋渡しをすべく、アイデアや技術をシェアし、小さな手漉き工房の支援を行っているという。日本での和紙の活動もこの様な社会的視点を取り入れれば、もっと広がりが出るかもしれない。



日本橋小津ギャラリーでの作品展

FDH URL:
<http://www.friendsofdardhunter.org/>



社長の山田晃裕さんと奥様の京代さん

■山田兄弟(けいてい)製紙株式会社
「企画力をつけなくては」

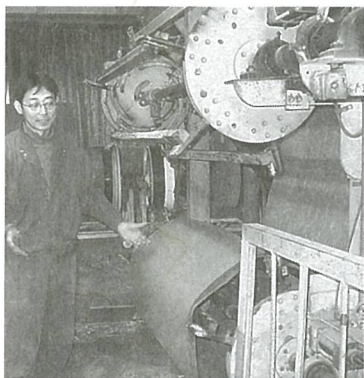
山田兄弟製紙は、明治の初めまで養蚕業を営み製糸業を営むが、明治十五年(一八八二年)、曾祖父に当たる六代目山田九兵衛氏が奉書漉きを始め、製紙業に転向して現在の会社を創業した。祖父の七代目九兵衛氏は、局紙を漉き始め、同時に富山の薬袋なども製造した。日華事変後の昭和十二年(一九三七年)、大蔵省より紙幣抄造を受注し、株券などの局紙系の紙にウエイトを置いた。当時は四〜五十人で手漉きの局紙を漉いていた。昭和二十九年に抄造マシン(ウェットマシン)を導入。本格的に機械漉きにのりだし、爾来印刷特性のよい和紙を得意としてきた。昭和三十年頃から、襖の裏張りに使う「雲華紙」を製造し始める。襖需要が減ったとはいうものの、現在全国で二軒残っている雲華紙製造会社の一つだ。ちなみに残っているもう一軒も向こう三軒隣にある。創業以来、長男が紙を漉き、次男は紙の販売に従事し、兄弟が協力して家業を支えてきたので、社名は「山田兄弟製紙」としたそうだ。従業員九名。社長の山田晃裕さんと奥様の京代(たかよ)さんにお話を伺う。

URL:
<http://yamada-keitei.com/>

●雲華紙と漉き合せ紙

雲華紙は、昔からのうちの主力製品のひとつで年間、四〜五百トン製造しています。全売上の四割くらいでしょうか。私が大学生の頃には、二十四時間、機械が回りっぱなしで製造していたときもありましたが、今は一日八時間回せば足りています。百分新聞古紙で、なるべく薬品を使わず作っています。新聞紙も会社によって成分が違うので、使ってみないと分からない所もあって、品質保証が難しいところです。土台のグレーの紙に白い紙を漉き合わせ、雲が華のように浮かんでいるので「雲華紙」というのです。白い紙の部分が湿気を吸って調湿作用があります。

他には小間紙用に二枚の紙を漉き合わせて模様を作る「漉き合せ紙」があります。製造ロットが多いのが少し難点ですが、常時ストックしています。もう少し用途開発を考えないといけません。



100%古紙原料の「雲華紙」の製造現場

●やっと育ってきたヨシ紙

株券の電子化で証券用紙の受注が見込めなくなったので、次の商品として育ててきたヨシ紙が、最近やっと動いてきました。十三、四年前、滋賀県近江八幡のヨシ問屋さんの西川嘉右衛門商店が琵琶湖の葦で商品を開発したいとい

うので、相談のつてほしいというお話でした。その時は採用されませんでした。ヨシ紙にするノウハウは随分研究しました。何年か後に、淀川でヨシの保全活動を行っている「鶴殿ヨシ原研究所」の小山弘道さんという先生とお知り合いになり、再びヨシ紙に関わることになっ



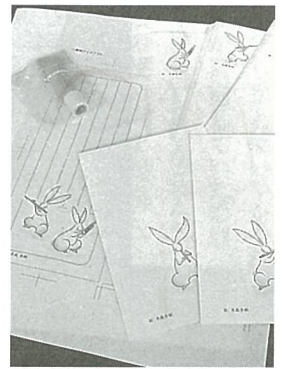
毎年従業員総出で参加する鶴殿のヨシ刈り

たのです。ヨシは富栄養化物質を吸収し、水の浄化作用がありますが、刈り取らないとせっかく吸収したリンや窒素が又水に溶け出してしまいます。毎年春先には従業員総出でヨシ刈りに行きます。刈り取ったヨシはパルプに加工し、三十〜百%配合してヨシ紙を作ります。ヨシ紙は繊維が細くて短く、ふわつとした仕上がりになります。薬品は最小限にして、印刷特性は上げなくては使ってもらえません。

最初の十年は毎年ヨシ刈りには行くものの、紙は売れず、パルプの在庫ばかりがたまっていき、ある年はさすがに勘弁してもらおうと思つたときに、大手自動車ワックスメーカーで使う封筒を全部ヨシ紙にしたいという話が舞い込んできました。その後も摂津水戸信用金



2009年のエコプロダクツ展でのブース



東儀秀樹さんのイラスト入り
ヨシ紙便箋セットと
ヨシで作ったひちりきの舌(した)

庫で採用され、ついにはコクヨさんがヨシを中心にした品揃えをしたいから、一緒に開発しました。そんなかというお話が来ました。やめようかと弱気になっていた時に、にわか市場が動き出したのです。商品としては割高なのですが、思いや意味をきちんと伝えれば、売れる所には売れるのかなあとという確信が湧いてきました。鶴殿のヨシは「ひちりき」という和楽器の葦舌(した)と呼ばれるリード部分の材料として昔から有名なのだそうで、ミュージシャンの東儀秀樹さんも保全活動を広めるためにイラストを提供してくれました。それを便箋セットにして発表する予定です。

●企画力がものを言う

和紙業界以外の方のおつき合いも多くなり、勉強になります。ヨシ紙製品を共同開発した担当の人なども、決して妥協せず、いい紙、

悪い紙をはつきり言ってくれます。来年開催の「生物多様性条約第十回締約国会議」(COP10)の生物多様性日本アワードにもノミネートされたり、エコプロダクツ展のブースを出すのも二年目になりました。今強く感じるのは、企画力を付けなくてはならないことです。売り方やアピールポイントも提案をしないとヨシ紙は売れませんし、そういう売り方ができる紙だと思っています。概してメーカーは、売り方が分かりません。結局自分たちは何が売りたいのかということをしちんと意識して、商品や企画を考え、直接使い手の声を聞ける場所に行くことが大切だと思っています。それを問屋さんとやるのか、組合とやるのか臨機応変にビジネスチャンスを作つて、挑戦していかなくてはいいですね。

和紙ニコナー

■社会貢献事業「デザイナーショーハウス」で和紙の部屋

一九四七年に米国で設立された非営利団体IFDA(インターナショナル・ファンディング&デザイン・アソシエーション)の日本支部(二〇〇八年開設)は、「デザイナーショーハウス」というチャリティ・イベントを、ホテルシーガルてんぼーさん大阪で開催する。同協会はファニッシング(家具・照明などインテリアエレメントの総称)デザイナーの世界的な組織で、デザイン業界における人材交流や育成、慈善事業などを行っている。「デザイナーショーハウス」は、十一名のデザイ



詳細は:
<http://www.dshjapan.com/>

ナーがホテルの各部屋を改装およびデコレションし、一般の人に入場料二〇〇〇円でみていただき、その収益金をチャイルド・ケモ・ハウスという小児癌の子供の施設をつくるNPOに寄付するという社会的な活動で関西では初の試み。デザイナーは改装費を負担するが、自分の力を見せるショールームとして協力する材料メーカーは使用された商品をアピールする機会、日頃あまり知られない施工者も表に名前が出る機会、場所提供のホテルは社会貢献のアピールや集客ができるなど、かかわる人全てにメリットがあるイベントだ。

参加デザイナーの一人、桶屋かおるさんは和紙を使った部屋を提案する。コンセプトは『大切な人と過ごすリビングルーム』和紙を使ったモダンスタイル。『和紙』というと『和風スタイル』が一般的ですが、和紙を使用しても、あまり和に偏らないようにモダンスタイルにコーディネートし、仕上げようと思っています。私自身が福井出身ということもあり、和紙(特に越前和紙)には、とても魅かれています。一般の方に和紙のもつ柔らかな空間を見ていただき、和紙を使った部屋の心地よさを感じて欲しい」と抱負を語った。二月六日から二十日までの会期中、展と併行して子供も大人も楽しめるデザイナーワークショップも開かれる。

情報欄

●イベント情報

■平成22年越前和紙祈願祭及び漉き初め式・年賀式
時:平成22年1月5日(火)
場所:卯立の工芸館 (越前市新在家町)

■越前若狭の物産と観光展
時:平成22年1月21日(木)~26日(火)
場所:東京新宿 京王百貨店7F(展示・即売あり)

■伝統的工艺品展2010

時:平成22年1月27日(水)~2月1日(月)
場所:日本橋高島屋8F(展示・即売あり)

■「越前和紙展」

時:平成22年2月3日(水)~4日(木)
場所:東京飯田橋 大日本商事株式会社本社ビル
「素の紙展」も併催します

編集後記・和紙のファンは圧倒的に女性が多いと思います。うちくが語れる歴史ある和紙を、面白いアイデアで、キャッチーに、素敵に使いたい。そうすればお友達にも自慢でき、話題性もある。この季節、クリスマスやお年賀などチャンスは多いので、和紙のいけてるしつらえをもっと広めたいものです。(よ)

季刊・和紙だより 第25号(2010年冬号) 発行日:2010年1月7日

発行人:福井県和紙工業協同組合 山田益弘 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所:右衛門佐美佐子事務所 〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL: 075-712-8834 FAX: 075-702-6223 E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp

編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子

※無断での転写・転載はお断りします。